

昭和の東南海地震体験談

氏名：橋上 浩代(はしがみ・ひろよ)
生年月日：昭和9年2月20日
地震を体験した場所：那智勝浦町大勝浦
当時の家族状況：父、母、弟2人、妹



1) 地震発生時の状況

当時小学4年生で地震発生時は、勝浦小学校のグラウンドで戦時中のため、負傷者が出た際の応急処置の指導を受けていた。揺れがあった後、先生がグラウンドに留まるよう生徒に促したにもかかわらず、何人かは自宅に戻ったが、自分は指示に従った。グラウンドは高台にあり、周りの山は崩れはじめ、下(大勝裏側)からは大勢の人が避難しに上がって来た。中には服が濡れていた人もいた。正門からは築地の人たちも上がって避難した。

その時は快晴の空が急にどんよりした雲に変わった。

2) 津波襲来時の状況

グラウンドの端に金棒があり、そこから弁天島を見ると潮がスースーと引いていき岩肌が見え出した。当時、弁天島の手前は砂浜で遠浅になっており、そこでよく泳いだため、岩がどこにあるか把握していた。「わあ、岩が見えてきたわ」と弁天島の向こうを見ると、沖の方から太い1本の線が真っ白になって押し寄せてきた。(右、写真 勝浦小学校から見る弁天島方面)



自分はそれが津波だと分からなかったが先生が津波だと言っていた。その頃、国語の授業で(稲村の日)の事を習った。津波は、凄まじくゴーと音を立てながらライオン島とオグソ島を乗り越え、さらに弁天島を乗り越えて、那智湾方向へ力強く流れて行った。那智湾から引き返してきた波はドロドロで、瓦が剥ぎ落とされた5~6軒の家やたくさんの桶が流されてきた。津波は行ったり来たりを幾度も繰り返した。最初の揺れがあってから15分後くらいに津波がきた。地震が治まるまで2時間はかかった。(下、写真 左手前、弁天島 右、ライオン、オグソ島)



3) 家族の行動・被害

波も治まったので、先生の了解をもらって帰宅すると、家族の皆が心配そうにまっけてくれた。皆、裏山に避難していて無事だった。

家の時計を見ると、針は 16:00 を指していた。電気は停電しており、父親が皿に油を入れて、紐に火を付けて明かりにした。

4) 集落・周囲の被害

自宅は浸水しなかったが、浜寄りの3軒目の家は床上まで浸水した。

現在、大勝浦にある公衆浴場、はま湯温泉の裏通りにある親戚の家はふすまの上まで浸水した。大勝浦や築地は半分以上が浸水したようだ。隣のおじさんが漁に出ていた時、突然、船底がつかえたような違和感を覚えた。溝口方向を見ると潮が真っ白になっており、とっさに津波だと察し、静かになるまで沖に留まり、その後、無事に帰ることが出来たようだ。

大勝浦で幼児が津波で流され、後に死体があがった。大勝浦での被害者は少なく、亡くなった人は築地の人が多かった。

5) 地震・津波後の生活

その後も余震は続き、地震のあとは津波がくると思い、夜、地震が揺れると布団をもって大勝浦の裏山に寝に行った。12月だったが特に寒いとは思わなかった。

1~2ヶ月も大小の揺れが続いた。

当時、食べ物に乏しく、平屋の屋根に干していた芋も地震で地面に落ちたが、それを拾って食べた。当時、勝浦に水道はなく、水は近くの井戸でまかかった。

小学校もしばらく休校であった。いつ授業が再開されたかは覚えていない

6) 次の災害への備え

経験から地震が揺れたら、すぐに津波が来るとは思わなくてはいけない。

区の防災活動が盛んで、食料や用具も備蓄されていると聞いているので、まずは自分だけでも、近くの裏山に避難することが重要。今後、避難場所に仮設トイレを設置されることを希望している。

7) その他

東南海地震を体験された弟さん二人は地震発生時には裏山で遊んでいたが2人とも記憶が無いとの事。

右の写真は弁天島、この島を乗り越え津波は襲ってきた。

